

平成 30 年度第 2 回まちづくりボランティアセンター運営委員会**【A グループ討議要旨】****テーマ：まちづくりボランティアセンターの機能強化について**

【香山委員】先ほど地域福祉コーディネーター研修に関して要望が多かったので、これに関してのご意見からあれば。

【中橋委員】コーディネーター研修等に関して、市町村を含めて交通整理をしたらどうか。まちづくりボランティアセンター（以下「VC」）の機能として、もっと県内をリサーチする機能は一番最初に設けてほしい。何かをしてほしいというよりニーズを拾ってやる必要があるのでは？今県社協は、他のところで事業化したものをやっている印象がすごく強くなっている。VC への要望として、市町村のリサーチ機能を高めてほしい。

【事務局（福澤）】ずっと県社協がいわれているのは、事業はいっぱいやっているけれども、調査・研究機能が弱いということでは言われている。新井委員からも以前アドバイスいただいたが、現地へヒアリングに行くだけでも相当な情報量があり、必要だと思う。地域福祉コーディネーター研修には県が関与していただくことになった。また支え合い活動支援事業の中で、住民同士が地域課題を考え合う場づくりと地域支援をすすめることを事業化し、県補助事業となった。人材養成とあわせて、現場での情報共有を行いと考え、認めてもらった。研修だけでなくあとのサポートも行いたいと考えている。

【山岸委員】今現場で悩みとして、協議体をどう回すかに一生懸命になってしまって、協議体を始めた住民もなにをしていいかわからなくて前にすすめない状態。たとえば、政策の 1 つとして地域のいいところ、宝探しをしましょう、そしてできることを話し合いましょうということになっているが、その先がわからない。コーディネーターも住民も悩んでいるのが実情。研修で知識ばかりふくらんでもどうしていいかわからない。

【中橋委員】住民支え合い事業の会議の中では、コーディネーターが始めようとしていたものに対して、アドバイスというか寄り添うような形で動かしていた。その中でいろいろな物の見方を提示することもあるが、一步を踏み出すところに寄り添うという形。生坂のケースでは、端田先生が学生さんを連れていっただけともいえるけれど、意義があったと思う。丁寧にやったのは、お茶会など、今までできていなかったものを、私たちが行くので一緒にやりましょうよという感じで日をきめたぐらいで、その程度でもいいと思うけれど・・・コーディネーターさんは敷居が高いと思っている。

【新井委員】生活支援コーディネーターの位置づけは、市町村によって違うと思う。もともというワーカーさんを生活支援コーディネーターとして位置付けた。その人たちが協議体をつくれと言われて協議体づくりが目的で動いている。先日参加したある会でも、何も

進まないといっている。とりあえずお茶のみ場は始まった。課題はでたが解決する仕組みや思いが進んでいかない。長野市で地域福祉計画をつくって、地域で課題を解決していきましょうという計画をつくったが、本来どおり機能していれば、こういう形でいまばたばたしなくてすんだのかと思う。

【山田委員】お聞きしたいのだが、地域の各市町村の社協 VC の動きというのは進化しているか。長野市 VC は以前に改革をやって、動く運営委員会としてやりましたといって、課題がでてきたら課題ごとにプロジェクトをつくり、いい形で VC 全体が動くしくみをつくっていたが、思うように継続できなくなってしまった。

【香山委員】現場がどんどん変わっていくのに対して、社協 VC スタッフがついていけない感じ。そこまで地域に入り込めないで対応できていない。

【山田委員】NPOをやっているが、社協 VC と連携をとって風穴をあけようとしているが、なかなかいちばん難しい。企業以上に社協は連携がとれない。

【香山委員】社協に行政の影響が強くなりすぎて、人事異動もあり積み上げたものがかわっていった。長野市の行動する運営委員会といていたが、崩れてきてしまった。現場が日々の業務で追われて忙しくなっている。

【事務局（福澤）】中間支援といういい方は、最近あまり聞かないのはそのせいでもあるかもしれない。

【山田委員】どっちを向いているかという、VC は県民の方を向いていなくてはいけない。まちづくり VC の趣旨に書かれているとおり、住民の方を向くべきだと思うが、役所の方を向いていて、住民の方を向いていないという状況で、どうやって地域福祉を進めるのか。

【事務局（小穴）】社協もその昔、ボランティア地域活動センターと名乗っていたころがあった。VC の運営委員会を軸にして、その中で地域活動をやろうとした時期があった。県社協も 1 階にカウンターを出しながら、ダイナミックな活動をしようとしていた時代があった。その延長で今の状況もあるが、つくって崩れてまたつくるといふ繰り返しだと思えば小地域も同じような繰り返しの状況だと思う。以前のイメージをもちつつ、新たなものを構築していく方がわかりやすいかなと思っている。

【山岸委員】今「まちづくり VC」というということにするのは、ある意味勇気があると正直思った。ボランティア活動というある意味あいまいなものを主にしようということに。有償ボランティアもあり、住民活動とか市民活動とかいろんな名称が考えられるけれどあ

えて VC として打ち出すのか、と思った。ボランティアコーディネーターという名称も端におかれそうな状況。VC の状況は市町村によって全く違う。安曇野市社協は、私の机の上で VC。というところもあるので実情をよく知って。あえて VC と打ち出して、支援していくという方向性を見せてくれることはいいことだと思う。最近ボランティアというのは肩身が狭くなっている。

【山田委員】肩身が狭いというよりも、新たなボランティア像が必要になっている。ボランティアの力がないと世の中動いていけないという時代になってきていることは間違いない。ボランティアを今までと同じような概念で考えていると難しい。もう一度ボランティアとは何ぞやという原点に返らなくてはいけなくなっている時代にいると感じている。

【事務局（福澤）】最近いろんなところで、地域の力を信じる・信じていないみたいな話をよくきく。VC も、地域住民の力を信じる大前提で、そこから多様なものが生まれるはず。福祉の業界の中でも地域の力をあまりにも軽視している雰囲気があって、社協の中で VC が軽視されているというところにもつながっているのではないかな。専門職が関われば何でも解決するという考えもあるようだが、そうではないと思う。

【香山委員】災害時のニュースで、耳の聞こえない方が、情報を伝えるところが何もなくて、地域の人とだれもつながっていないくて、ケアマネさんとだけつながっていて、結果的に救えなかったという例があった。専門家だけつながって地域とつながっていないという状況がありうる。そういう状況をひもときながら、もう少し横に地域とつながるようなことができるといい。まちづくり VC としてもう一度打ち出していただいたのは、非常にいい時期だと思う。

【山岸委員】VC って中間支援組織だと最近みんな思っていない気がする。


【香山委員】長野市の VC に 20 年以上関わった。当初小地域型のものがなくて、小地域に拠点と人材を置いて地域 VC を創りましょうという提言を平成 16 年ぐらいにした。そこに対する中間支援であるべきなんだけれど、本来的な機能を職員が見失っている感じ。

【中橋委員】東日本の被災地になると、市民活動センター自体が中間支援組織として独立しているかのような、社協の中に別の部門をつくってそこに人を雇って動かしているのが多くなっている。神奈川県内で 10 万人以上の都市は、そういう機能を市民活動センターとして持たせてその運営自体は、専門職を入れずに本当にボランティアを雇用してやっているところもあれば、何人か配置したところに非常勤の市民の人たちを 3 年契約とか団体の人が働く仕組みを考えたりしている。

【新井委員】20 年後 30 年後を見据えてみたいところで、社協が問われる。

【山田委員】 ふんばりどころ。社協はものすごくいい位置にいる。民間でもなく行政でもなくすごくいい位置にいるのに、生かし切っていないと思う。

【中橋委員】 その辺の住み分けじゃないけど、生き残りも含めて、もう少し整理していかないと。市町村でもっていけないところのなんでも屋さんみたいな状態で、市は格式が高いからその前に民生委員さんに相談すると社協へという構造。そういう生き方も大事だとは思いますが、逆に言うとりサーチして地域の人材に特化して、そことつながれることを探ったり、市町村社協に寄り添っていくことを探らなくては。

【事務局（福澤）】 中間支援組織としての市町村社協の機能というところでいうと、になっている子どもカフェを通じて、1つのグループ支援としての助成金でもあるのだが、前段の学習支援なども含めて市町村社協とボランティアさんが一緒に講座に出ていただいたりということを考えている。申請窓口を市町村社協にしてつながりをつくって支援していきたい。活動起こしのノウハウをボラセン側も学べるようにしたい。

【山岸委員】 支援するときには支援するだけの力量がないと。こういう時にはどういう支援をしていくのだという事例検討みたいなものをしていかないと。最近の若手職員は経験がないから、アイデアがでてこなくて通り一辺倒の支援しか出てこない。うちの社協だけではなく、ほかの社協の人たちでも悩んでいて、相談するところがないらしい。企画書を書いたことがないという人がいる。

【新井委員】 県社協としては、コーディネーターをつくり出す人をつくりだす。そこに力点を置いたら特徴がでてくる。

【中橋委員】 今地域共生社会としてコーディネーターに対して厚労省が望んでいるのは、そこをまとめて新しい事業を起こしてほしいと考えている面もあるのだけれど、もう1つは事業を創り出せる人を育ててほしいというのがある。そうしないと持続的になっていかないので。それがあるので福祉教育の推進とかいうことがでてくる。中学生とか小学校6年生ぐらいに防災の講座をしたり、基本的なことは若いうちに押さえておいて伸ばしていく。かかわりを持たせたうえでいろんな人に教えてもらうという仕組みをつくっていかないと持続的にはならない。その素地的なものは、地域の中にあるお祭りのようなものだったりする。そういうものが今の時代欠けているので、福祉教育の中でもそういう視点のようなものを入れていけるといいと思う。支え合いとか助け合いについて、当たり前のようにやってきたという人がいるが、今の人達は支え合いや助け合いを早い段階で教えないとないまま育っていく可能性がある。だれかに恩を受けたりすることが学校以外にないと思ってしまう。自分がそのように受けた経験がないと人にもできないらしいと最近わかってきた。

【香山委員】人に迷惑をかけてはいけないといわれて育って、迷惑をかけることが得意じゃないともいえる。

【山岸委員】うちでは助けられ講座というのをやったことがある。住民支え合い事業のなかで支えられ講座をやったらどうか？

【山田委員】支えられ上手が大事。

【香山委員】信州型コミュニティスクール等の学校と地域の連携に関して、松代高校に評議員としてかかわっているが、校長先生から声をかけられて、来年はもっと本格的に地域学を展開していきたいといわれている。課題を共有して課題に対してどうやってとりくむかということをやろうとしている。よく調べてみたら望月高校が地域課題によく取り組んでいることがわかった。ああゆうものが、地区社協などと組んでやれるといいと思う。地元がサポートしていかないとできない部分なので。市町村社協が人材も提供してできるといいのだが。

【中橋委員】高校生等が地域と取り組むなかで、子どもたちが発表する機会がないことがわかって大人が反省したことがある。地域の人達に出す場というか、地域の人達と共有する場が足りなかったということに気づいたことがあった。いろんな意見をもっているのだけれど、友達同士でも恥ずかしくてなかなか言えなくて、大人がきいてくれるわけないと思っていた。

【香山委員】他の人と違う意見をいっちゃいけないというふうに考えている。自分の意見は恥ずかしいと考えていて言えないというのをすごく感じている。豊栄小3年間で豊栄活性化委員会をやって卒業してしまっただれがつづけるかというときに、地区社協が受け皿にならなかった。

【新井委員】飯田市の丘の上で、高校生だけがたまり場をつくってやっている例を聞いたことがある。そういったいい例を探して発信していきましょう。

【山田委員】我々自身も動く運営委員会になっていきましょう。現場へ行くと楽しいし。

【香山委員】山ノ内町のワクワク商店街など見せてもらったが、現場を見ると全然違う。

【山岸委員】みんなでこんなふうに話ができると楽しい。せっかくまちづくりVCなのだから、みんなが楽しく学べるようになっていけると。いいとこさがしをして、関わる人がどう一歩を踏み出したのかということを見るといいのでは。